

被爆者切明千枝子（きりあけ・ちえこ）さんの歌集出版に尽力したユース・佐藤優さんに訊く

以下は、2025年1月14日、佐藤優さんにオンラインでインタビューを行った内容を編集部がまとめたものである（文責：事務局）。聴き手は、日本反核法律家協会の田中恭子事務局が務めた。（文中の脚注は編集部による。）

佐藤 優（さとう・ゆう）さん

宮城県仙台市の生まれ。平岡敬元広島市長著『希望のヒロシマ』に感銘を受け、熊本高校卒業後、2020年広島市立大学に入学し国際学部在籍。在学中に、原爆資料館に通い、オンライン被爆証言会で初めて出会った切明千枝子さんの話に惹き込まれる。切明さんの体験を基にした紙芝居制作プロジェクトで切明さんの下に通ううちに、彼女が歌人であることを知り、歌集の出版を決意。広島市立大卒業後2024年8月に歌集「ひろしまを想う」を出版。現在は一橋大学大学院社会学研究科に在籍。

プロフィール

——今日は、よろしくお願ひいたします。さっそくですが、佐藤さんはどのようなきっかけで、核や平和の問題に関心をもたれるようになったのですか。

私の親が転勤族で、子供の頃から全国各地に住みました。けれど生まれは宮城県仙台市でそこに両親の実家があり、当時曾祖母も健在でした。その曾祖母から戦争体験を聞いたのが、多分始まりだったと思います。原爆とは直接関係はなかったのですが、曾祖父が戦死したという話だったり、仙台空襲の話だったり。それで、戦争関連の映画やテレビのドキュメンタリー番組を見ても、自分の曾祖母が見ていた光景なのだろうか、曾祖父はこういう戦場で死んだのだろうか、と身内に引きつけて考える習慣が



佐藤 優さん

ついて、戦争被害について幼い頃から関心はありました。

小学生時代は静岡県沼津市で過ごし、その頃『はだしのゲン』閲覧制限問題がもちあがり、なんで子どもが読んだらダメなんだろうと思ったことを覚えていますね。その頃までは、原爆についての知識は『はだしのゲン』を読んだくらいです。熊本の高校時代、国語の授業で新書を読むという課題が出たときに、平岡敬さんの『希望のヒ



インタビュアー・田中事務局

ロシマ』¹を手に取りました。広島が何故カタカナなんだろう、と不思議に思って。それを読んで初めて、カタカナのヒロシマ、原爆のことについてこれまで何も知らなかったということに気がつきました。それまで一度も広島を訪れたことがなく、広島市の行政にも関心があったし、せっかくなら広島で被爆者にも会いたい。そんな思いに駆られて、『希望のヒロシマ』でも触れられていた広島市立大学を進学先を選びました。

大学では、国際学部で湯浅正恵先生の下で学びました。湯浅先生は、原発事故についても関心を寄せられていて、私と福島の問題を会わせてくれた方でもあります。広島だけ考えていては社会は変わらない、ということに気づかされ、私の卒論は、福島原発事故で広島に避難してきた人をテーマにしたものでした。湯浅先生のゼミでは、国際関係や国際政治、国際平和など幅広く学ぶことができ、被爆者は日本人だけではないことも知りまし、日韓関係、日韓関係にも目が向くようになって、日本の加害の側面についても考えるようになりました。そのきっかけを与えてくださった方の一人が切明千枝子さんだったんです。

——切明千枝子さんとの出会いについて、教えてください。

私が大学に入学した2020年春はコロナ禍の真ただ中で、11月頃になってようやく授業が再開し、原爆資料館にも行けるようになりました。私が切明さんに出会ったのは、大学2年のときです。まだコロナ禍が続いていましたから、原爆資料館内ではなく、広島市立大学のサテライトキャンパスを使って、オンラインで証言会を開くと

いうことをやっていました。そのオンライン証言会のアルバイト・スタッフとして、被爆者の切明千枝子さんをお迎えにあがった、というのが彼女との初めての出会いです。機材のセッティングなど手伝いながら、その場で彼女のお話をうかがううちに、スタッフながら参加者のような気持になって、とても惹きつけられて、他の被爆者の方の話とはちょっと違うな、と感じたんです。

切明さんがお話されると、なかなか原爆の話に行き着かないんです（笑）。被服支廠全盛期の頃とか、出征兵士を見送ったことや、小学校2年生のときに馬が戦地に送られるのを可哀そうに思ったこととか、軍服を作るために殺されたウサギの肉を食べた大きなショックを受けたこととか。15年戦争当時、小学生だった切明さんが見た戦争、そのときの思いがひしひしと伝わってきて。この人の話をもっと聴きたいなと思いました。もちろん彼女自身、原爆によって甚大な被害を受けています。70人近い身内を亡くされています。

でも、切明さんの中では、加害者としての、軍都広島を語らないことには原爆の話ができないのだなと実感しました。切明さんは強い人だな、と思うと同時に、この先、原爆被害を伝える側になる私たち次の世代も、日本が何をしてきたかということを知らないで、その被害だけを訴えても何も伝わらない。切明さんと出会って、そのことを意識するようになりました。

——そんな出会いがあったのですね。その後、切明さんの歌集を出版するまでには、どのような経緯があったのでしょうか。

その後、切明さんの体験を紙芝居にする

1 平岡敬著『希望のヒロシマ—市長はうったえる』（1996年 岩波新書）



歌集「ひろしまを想う」

プロジェクトをスタートさせました。その制作のために、毎週切明さんのご自宅に通うようになって。どういう紙芝居をつくらうか、模索していたのですが、対象は小学生にすると決めていたので、当時小学生だった切明さんから見た戦争を描くことで、同世代の子どもに伝わるのではないかと思います。

広島での平和教育を外から眺めると、子どもが受け身で内容も形式ばっているように感じていたので、子どもが自発的に、自分で考えられるようなとりくみはできないだろうかと考えて、紙芝居の絵を、小学生に描いてもらうことにしました。切明さんの話を私がシナリオにまとめ、それを子どもたちの前で朗読して、印象に残った場面を絵にしてくださいとお願いして、ワークショップのような感じで。70人くらいの小学生と出会って絵を描いてもらって、それを元に紙芝居を制作しました。表現するには、自分の中で一生懸命想像力を働かせなくてはなりませんから、小学生にとっては難しい作業だったかもしれません。ただ、私よりもさらに次の世代が生まれているの

だから、私自身、彼らと一緒に何をどのようにやればいいのか、どうやってつながっていったらいいのか、を考えたかったんです。

ともあれ、そんなことから切明さんのご自宅に頻繁に通うようになったのですが、最初は、切明さんが短歌をつくっておられること、歌人だということを全く知りませんでした。切明さんも何もおっしゃらなかったし。ある日、ふと「あの原爆の記憶と一緒に生きるというのはとても大変なことですよ。」と尋ねました。すると、切明さんは「悲しい記憶は、すべて私の武器ともいえる短歌にぶつけてきたの。」とおっしゃいました。それで短歌を詠まれていることを知り、私は深く考えもせず、ぜひ読みたいです、とお願いしましたが、最初のうちはなかなか見せてもらえませんでした。切明さんが投稿している短歌誌を読めばよかったですのですが、そこに投稿されていることも知りませんでした。

ただただ、読ませてくださいと言い続けて3ヵ月くらい経ったときでしょうか。ようやく読ませていただけました。本当に原爆と戦争の歌ばかりが並んでいました。切明さんは、ずっとこのことを考えて生きてこられたんだということも伝わってきましたし、短歌にはあまり縁のなかった私でも、さまざまなことを想像させる歌がたくさんありました。多くの人に知ってもらいたい、たくさんの人と一緒に読みたいと思い始め、初めは、展示や映像作品をつくるといったワークショップ実践を考えていたのですが、いろいろな人に相談する中で、まずは歌集として残すことが大切だ、と思うようになりました。

2024年4月からとりくみ始めて、私が預かった1500首の中からその3分の1の500首を択んで歌集をつくり、たくさんの方の

ご協力を得て、8月、出版にこぎつけることができました。けれども、編集・制作の過程で、切明さんにとって短歌とは本当に心の奥底を表現するものなのだと理解するようになって、迷いも生じたんです。これまで強引に、何もわかっていないまま、読みたい、歌集にしたい、と切明さんにおねだりしてきた、そのことが申し訳なくなつて、歌集として世に出すことが本当にいいことなのだろうかと思ひ始めたんです。そんな迷いを、あるとき切明さんに正直に打ち明けたら、彼女は、自分も最初は躊躇ったけれど、自分のつくった歌たちが、次の世代の人たちの反戦や平和の思いにつながるのだったらぜひ出したいと思うようになった、と。

——切明さんにとっても、佐藤さんとの出会いは転機になったのかもしれませんがね。歌集ができて、どんな感想をおっしゃっていましたか。

それはもう、喜んでくださって。下手な歌で恥ずかしいなどおっしゃっていましたが、まず残ったこと、消えないということ。誰かが読んでくれるかもしれない、と

いうことをとても喜んでくださったので、一緒に作ることができて本当に良かったと思っています。

被爆体験証言者である切明さんの言葉を将来にわたって伝える役割の伝承者さんからは、証言の中には出てこなかった思いや体験が、短歌には現れていて、歌集に触れることができてよかった、と言われました。

私の周囲の若い友人たちも、証言集など長文を読むのが苦手でも、短歌だったら読めるかなと受け取ってくれて、こういう伝え方もあるんだということ、その可能性に気づかされました。被爆者の方の俳句や短歌、詩など、限られた文字数の情報しかないから、考えさせる余白がありますよね。切明さんの短歌を読んでから、証言を聴いたりビデオを観たりすると、その解像度が上がるのではないかと。そのようにつながっていくのが、一番いいのかなと思います。

——佐藤さんは今、大学院に在籍しておられますが、歌集を出されてからはどんなことにとりくんでおられますか。

社会学研究科・社会学部で戦争社会学



切明千枝子さんとともに

などがご専門の根本雅也先生のゼミにいます。そこで、最初は福島原発事故の避難者の問題に引続きとりくもうかと思っていたのですが、やはりヒロシマの方に気持ちが傾いて。今は、被爆者はどのようにして語り始めたのかということ、70年代、80年代にヒロシマ修学旅行を作り上げた教師の側から掘り下げたいと考えています。東京都葛飾区立上平井中学校の教師だった江口保先生は、後に上平井方式という言葉まで生まれるほど、ヒロシマ修学旅行の土台を作り上げた方です。彼は長崎の被爆者で、後に東京で教師になり、生徒に被爆者の声を届けたいと、広島に通いつめ、被爆者のお宅を一軒一軒訪ね歩いて頭を下げてお願いをされたそうです。実は、切明さんもお願ひされた一人です。最初は、体験を語るなんて無理、と断られたそうですが、結局、江口先生の熱意にほだされ、語り始めて今日に至っているとうかがっています。

今、私たちは被爆者の話を聴けることを当たり前のように思っていますが、実際には、被爆者の方が語り始めるまでにどのような葛藤あったのか。すぐに語るができなかったのはなぜなのか、という視点が抜け落ちているように感じています。高校生平和大使が自らを「被爆者の話を直接聴ける最後の世代」という言い方をすることがありますが、「被爆者の話を聴ける」のが当たり前になるまでの過程、そして当たり前になっていることの意味を問い直したいのです。そして、被爆者が語り始めた最初の時期を一緒に歩んできた教師たちも、今70歳代後半から80歳代にさしかかっていますから、彼らの声を残すことも大切なのではないかと考えています。

被爆者が語り始めるということでは、今、

篠田恵（しのだ・めぐみ）さんという今年3月に93歳になられる方の自分史を8月に出版しようと準備しているところです。篠田さんは、映画『アオギリにたくして』²で描かれた沼田鈴子さんから、語りなさい、と言われて始められた方なので、今、沼田鈴子さんのことも書いています。

——今年3月には核兵器禁止条約の第3回締約国会合、4月末から5月にかけて2026NPT再検討会議第3回準備委員会も予定されています。こういった動きの中で、核兵器も戦争もない社会を創り上げていくために、何が一番大切になると思いますか。

これまで出会った被爆者の方たちは、若い世代に伝えたいという想いを強く持っている、ということを感じてきました。それは、やはり被爆者が世界からいなくなった時代に、自分たちの経験と想いをつないでくれる人を一人でも増やしたいという気持ちからではないかと思います。ですから、一度出会ってお話を聴かせてもらったからには、一人ひとりの記憶と想いをしっかり受け取る努力をして、想像力を紡いで、バトンをつないでいく役割を果たしたいと思っています。そうやってつないでいくなから、今は被爆者の方と一緒にできることを、ひたすらやり続けたい。そんなふうに考えています。

ただ、私の周囲の友人たちからは、「そういうのやっていて楽しい？」と不思議がられることもありますし、イベントに誘っても敬遠されがちです。あまり理解されないこともあるのですが、どうやったら彼ら彼女らに興味をもってもらえるかなと考えています。たとえ興味があっても、いつもの顔ぶれ、グループが集まっているイベン

2 本誌18頁以下参照。

トには、なかなか入りづらい、という気持ちもあるのかなと思います。被爆者証言会に来てくれた人から、原爆の問題に関心があっても話す場所がない、と言われたこともあります。

核兵器の問題を扱うイベントは、自分たちより年配の人たちがやっているイメージを持たれていて、何も知らなくても構わない、誰でも気軽に集まれる、若い人が中心のイベントをやりたいなと思います。できあがってし

まったグループの集まりではなく、関心を持っている個人が集まっているイベントだと受け取られるような発信の仕方など、いろいろ工夫が必要なのではないでしょうか。やはり、被爆者の声を一人ひとりに届けることが、何より大切な、核兵器をなくすための第一歩だと考えています。

——今日は、長時間にわたり貴重なお話を聴かせていただき、有難うございました。

